

エリート・ドクターと再会したり、  
溺愛が始まりました

都心から電車で十五分ほど。高級住宅地と名高いその土地に、それはそれは煌びやかな建物が一棟ある。

二階堂総合病院。  
にかいどう  
総合病院。

名前だけ聞けば、よくある普通の総合病院のように思えてしまうそこは、今とても話題になつている病院だ。おそらく、初めてここに足を踏み入れた人物は皆、口を揃えてこう言うだろう。

“ここはホテルかお城か何かか？”<sup>おとこ</sup>と。

中が見えないようになつていて、厳かな雰囲気の外観。そのエントランスの向こうには柔らかな光が差し込む広いロビー。さらにその向こうにあるレセプションにはきつちりと髪を束ねた姿端麗な女性が二人。右には大きなエレベーターが三基。左には夜間面会用の通用口。そこにいる初老の男性は、どこぞのコンシェルジュのように穏やかな笑みを浮かべている。天井にはシャンデリアが輝き、どこからか静かなピアノのクラシックが流れていた。とても病院とは思えないほど煌びやかで上品な雰囲気が漂うことは、いわゆる“VIP 御用達”の総合病院だ。政財界の重要人物や大物芸能人、さらには世界的に名の知れた大企業の重役などを主な顧客としており、そのVIPのプライバシーを守るべく、万全のセキュリティが敷かれているのが最大の強み。

外来は基本的に予約制で、入院中もお見舞いに行けるのは事前に患者が許可した人か、近親者の

中でも限られた人だけだと言うから驚きだ。

そんなV.I.P.御用達、いや、V.I.P.専用と言つてもいいかもしない病院の中を、私は恐る恐る突き進む。外は夏の日差しが肌を焼くようにジリジリと強く照りつけていたけれど、ここは程良く冷房が効いていて一気に汗が引いていった。思わずため息のような息を吐くけれど、私はここにお見舞いに来たわけでもないし、まして患者でもない。もちろんV.I.P.なわけがない凡人の私は、この空間に存在していること 자체が場違いなのは自分が一番良くわかつていた。

「本当、どこを見ても落ち着かない……」

しかし、呼ばれてしまつたのだから仕方ないじやないか。

きよろきよろと辺りを見回して、自分のスマホとロビービーを見比べている私。

「もう……どこにいんのよ……まだかな……」

おそらく周りからは大分怪しく見えているのだろう。レセプションから出てきた女性の一人が、怪訝そうに私の元へ歩いてきた。

「いかがなさいましたか？お見舞いですか？患者様のお名前を伺つても？」

凛とした綺麗な声と立居振る舞いに、凡人の私は圧倒される。

「い、いえ……あの、お見舞いではないんです」

「……では、患者様でしようか」

「いえ違くて。紛らわしくてすみません。脳外科医の百瀬傑（ももせ たくま）に会いたいんです……」

萎縮しているのが丸わかりで情けないものの、馬鹿みたいに声が震えた。

「百瀬ですか？……失礼ですが、どちら様でしようか。本日百瀬宛てにお客様がいらっしゃるとは私は伺つておりませんが、アポイントはお取りでしたか？」

一気に私を疑うように目が鋭くなつた女性に、肩が跳ねる。

「あ、……すみません、申し遅れました。私、百瀬傑の——」

続きを言おうとしたところで、「——唯香！」と、私を呼ぶ声が聞こえて振り向いた。

「百瀬先生！」

女性が驚きの声をあげて一礼する中、私はその無駄に高い身長と奥二重の垂れ目を睨み付ける。

「……傑くん！遅いよ！」

「ごめん唯香。オペが思つてたより長引いた」

「ロビーまで迎えに来てくれるつて言うから來たのに。私ここ來たの初めてなんだから、ちゃんと待つてくれないと困るよ」

なるべく目立たないように小声で文句を言う私をまあまと奢めるこの男に、私は一つため息をこぼす。

「悪かったって。ほら、行くぞ」

事態を飲み込めていないレセプションの女性に「ああ、こいつ俺の身内だから。連絡してなくて悪かったよ。こいつに非は無いから責めないでやつて」と言い残して去つていく傑くん。

「百瀬傑の従兄妹の春風（はるかぜ）と申します。お騒がせして申し訳ございませんでした。失礼します」

私も慌てて深々と頭を下げるから、すでに数メートル先を歩いている傑くんの後ろを追いかける

ようになんと足を進めた。

目の前を歩く医者は、百瀬傑。三十五歳。私は春風唯香の従兄妹だ。私よりも十歳年上の彼は、この病院に勤める優秀な脳外科医だ。今もスクラップの上に白衣を身に纏い、すれ違う看護師に何か指示を出している。胸ポケットに入っているであろう端末は、オンラインコードの度に大きな音を鳴らすのだろう。傑くんが歩けば、看護師や関係者は皆揃って頭を下げたり端に避けたり、敬意を全面に表した態度を取る。この病院で百瀬傑と言えば、脳外科の中でも一、二を争うエリート医師なのだ。

エレベーターに乗りこむと、傑くんは行き先のボタンを押してくれた。どうやら向かう先は十階らしい。この病院は一階と二階が吹き抜けのロビーとなつており、三階にはコンビニやレストラン、入院患者用の美容室やエスティースペースまである。四階から上が病棟で、最上階である十二階は院长室とその他重役の部屋があり、カードキーを持つている限られた人物でなければエレベーターのボタンすら押せない仕組みになつているのだと傑くんに聞いたことがある。

一切の揺れを感じないまま小さな音を奏でて到着を知らせたエレベーター。開いた扉から降りると、やはりそこはどこぞのホテルのフロアのような煌びやかな空間で、とてもここが病院だとは思えない。

「すつぐ……」

「ああ、これ？なんか院長の趣味らしいぞ」

「院長先生の……？」

本当はホテルを営業したかったのでは？と思いたくなつてしまふ派手さに眉を顰めながらも、

そのまま傑くんの後ろを少し歩いていく。すると奥にある大きな扉の前で足を止めた。そこはどうやら病室のようで、”一〇〇五”と部屋番号だけが記載されている。普通の病院ならその周辺に患者の名前が書いてありそうなものだけど、ここは違うらしい。

そんなことを考えている間もなく、傑くんは部屋の扉を開いた。

「ちよつと傑くんつ、ノックくらいしなよっ」

「あ？ 別に来ることわかつてるからいいんだよ。……梨香子。唯香が来たぞ」

「……し、失礼します」

ちよいちよいと手招きされて、私も恐る恐る病室に入る。中は十五畳ほどの広い部屋になつており、扉から向かって左に大きなクイーンサイズのベッドがある。その反対側にはソファとテーブル。大きなクローゼットと壁掛けの大画面の液晶テレビ。奥には簡易キッチンに冷蔵庫まであり、病院なのにそこらのアパートよりも綺麗で設備が整つていて驚いた。むしろ私の家よりも豪華だ。もはやここに住めそうな気さえしてしまう。

そんな部屋のベッドには、私もよく知つている人物がいた。

「……梨香子さん」

「唯香ちゃん、いらっしゃい」

柔らかな微笑みに、私も肩の力が抜けて口角を上げる。

「唯香ちゃん、ごめんね。こんなことお願いしちゃって」

「いえ、いいんです。些細なことですし、梨香子さんの頼みですから。私で良ければいくらでも

使つてください」

「本当にありがとう。助かるわ」

百瀬梨香子さん。ここまで案内してくれた傑くんの奥さんだ。梨香子さんは現在妊娠九ヶ月で、もうすぐ第一子が産まれる。ここ、一階堂総合病院の産婦人科で入院しているのだ。

「入院生活はどうですか？」

「うん、何もしないでつて言われると逆に困っちゃつて、ずっと本読んだりテレビ見たりしてるんだけどね。さすがに入院時間が長いと暇で暇で。それにずっとダラけちゃつてるから、この子が産まれた後にちゃんと母親が務まるのかすごく不安なの」

妊娠後期になつて急に血圧が上がつてしまつた梨香子さんは【妊娠高血圧症候群】と診断され、お腹の中の赤ちゃんに危険が及ばないよう大事をとつて入院することになつていた。  
すでに一ヶ月ほどが経過しており、幸いにも今は安定しているため、もう少し経つたら予定帝王切開で出産する予定だ。

そんな梨香子さんの元に、何故私が呼ばれたのか。

「本当にごめんなさいね。突然、着替え持つて来て、だなんて。仕事で忙しいのにわざわざ届けてもらつて申し訳ないわ」

「いえ、傑くんじゃ忙しくてそんな暇無いでしようし、全然大丈夫ですよ。……むしろ私が勝手にクローゼット開けちゃつて本当に良かったんですか？」

「うん。唯香ちゃんなら全然良いの。助かつたわ。ありがとうございます」

梨香子さんが入院前に用意していた、出産時やその後に使う予定の洋服や下着の数々。まさか出産まで入院することになるなど微塵も思つていなかつた梨香子さんは、すぐに退院できると思つていた。そのためその荷物を持つてくるのをすつかり忘れていたらしい。ちょっと、いや大分抜けている人なのだ。最初は傑くんに持つてきてほしいと頼んだらしいものの、断られてしまつたらしい。なんでも梨香子さんの産後に少し休暇を取るために今のうちにオペの予定ができる限り詰め込んでいて、家に帰つている暇が無いんだとか。

そこで白羽の矢が立つたのが、私だつた。

この病院と二人の自宅マンションのちょうど間にある会社に勤務している私。今朝傑くんから電話があり、「悪いんだけど、梨香子の着替え持つて来て欲しいんだよね。今日の十二時半くらいでいいか? 病院のロビーに来てくれば迎えにいくから」と一方的に言われて電話を切られた。

そのまま傑くんに掛け直したところで適当人間の傑くんがもう出てくれないのはわかっていたため、梨香子さんに直接かけ直した。すると平謝りで「産後に使う着替えやあれこれを持って来て欲しい」とお願いされたわけだ。

いつも何かが必要な時は傑くんの母親が持つて来てくれるらしいのだが、さすがに義母にクローゼットを探されるのはちょっと嫌だつたらしい。義理の従妹である私だつて、立場としては似たようなもののはずなのだが、昔から妹のように可愛がつてもらつてゐるからだろうか。どうやら私は例外らしい。梨香子さんが入院した時に、「何かあつたら頼るかもしれない」と言われて半強制的に合鍵を渡されていたものの、まさか本当に使うことにならうとは。

「じゃあ、私は会社に戻ります」

「ごめんね、唯香ちゃん。忙しい時に」

「いえ、全然大丈夫です！ また何かあつたら言つてくださいね」

「ありがとう」

「あ、唯香、帰る前に悪いんだけどちょっとした用があるんだ。少しだけ時間いいか？」

帰ろうとしたところで傑くんに呼び止められる。私は腕時計に目をやり、頭の中でこの後のタイムスケジュールを確認した。

「あー……、昼休み終わっちゃうから十分くらいなら」

「わかった。すぐ終わるから。悪いな、ちょっと移動するぞ」

「うん。……じゃあ梨香子さん、無理なさらないで、無事に産まれることを楽しみにしてますね！」

「ありがとうございます。産まれたらすぐ連絡するわね」

「はい。じゃあ、失礼します」

梨香子さんに手を振つて、また傑くんの後を追いかけるように病室を出た。

「……プレッシャーかけちやつたかな……」

「ん？」

「梨香子さんに。無事に産まれること楽しみにしてるつて」

ただでさえ入院していて体調面での不安も大きいだろう。無事に産まれてくることを一番望んでいるのは梨香子さんだ。妊娠中はかなりナーバスになるつて言うし、入院していれば尚更気持ちの

浮き沈みが激しいと思う。予定帝王切開で日が決められているからって、その前に陣痛が来たりとかも考えられるわけだし。そもそもお腹を切る恐怖もあるだろう。……他にもつといい言葉があつたんじやないだろうか。そう考えると後悔が募る。

だけど、傑くんはそんな私を見てあつけらかんとしていた。

「ああ、まあな。でも、梨香子は嬉しかったと思うぞ」

「……そう？ 怒つてないかな……」

「梨香子がお前に怒るわけねーだろ。そんな弱い女じやねーよ。大丈夫だからお前は黙つて連絡待つてりやいーの」

私の頭を雑に撫でて先を行く傑くん。

傑くんは適当人間だけど、間違つたことは言わないし梨香子さんのことを誰よりも理解している。だから、傑くんが言うなら多分大丈夫なんだと思う。そう思えるから不思議だ。

「ほら行くぞ。時間無いんだろ？」

「あ、うん」

振り返つて笑う傑くんに、頷いてから慌ててその背中を追いかけた。

「ねえ、ところでどこに行くの？」

「ん？ 医局」

「医局!? ……それ私が入つちゃダメなやつじやん」

絶対関係者以外立ち入り禁止のやつじやん。入つたら怒られるやつじやん。

思わず立ち止まると、「俺が許可してんだからいいんだよ。つべこべ言わずにちょっと来い」とさつきまでの笑顔はどこへやら、今度は不満気に顎でクイッと見てくるように指示する。

……本当、従兄妹だからって私の扱い酷くない？ 梨香子さんには絶対そんなことしないくせに。まあそれは当たり前だけど。

「えー……、後から他のドクターとか看護師さんとかに何か言われるの嫌なんだけど」

「言いたい奴には言わせとけ。ムカついたら俺の親戚だつて言つとけ。後から俺が黙らせる」

「……」

そんな横暴な。文句の一つでも言いたいけれど、口で傑くんに勝てるとは到底思えない。十倍くらいで返つてきそうだからやめておいた。

身内の私が言うのもあれだけど、そもそも傑くんは顔が整っているため既婚者なのにとてもよくモテる。それは職員に限らず、患者さんや病院に出入りしている業者さんまでとそりやあ幅広くモテているらしい。こうして横暴なところがよく顔を出し、梨香子さん以外には鬼畜と罵られても仕方ない発言ばかりなものだから、身内としてはどうしてモテるのか理解に苦しむところもあるけれど。腕の良さは確かなため患者からの評判は上々らしい。

そんな傑くんとただでさえ一緒に歩くだけで噂が一人歩きして面倒なことになりそうなのに、さらにそんな立ち入り禁止のところに私のような部外者が出入りしたとなれば問題視されてもおかしくないだろう。嫌だ、無駄な敵は作りたくない。

「ほら、早く」

しかし私の些細な抵抗も虚しく、腕を引っ張られて連れて行かれてしまう。エレベーターに乗つて十一階に向かうと、廊下を少し歩いた先にある医局の中に通された。

「お疲れ様でーす」

「うつ……、失礼します……」

痛いくらいの視線を感じる。もう帰りたい。

「誰？」

と近くにいた医者らしき男性が傑くんに声をかけた。

「ああ、従兄妹」

「関係者以外入れんなよ」

ごもつともな言葉に、傑くんは「ちよつと野暮用だから三分だけ見逃して。後でアイス奢るから」とあらうことか物で釣るうとする。

いい大人がそんなもので頷くわけないだろう。そう思っていたのだが……

「じやあ期間限定で昨日発売したばっかりのプレミアムミルクで」「マジかよ高えやつじyan。しかも下の売店にないやつ」

「よろしく〜」

見事に交渉は成立したらしく唖然としてしまった。

それでいいの？ この病院、セキュリティが売りなんじゃないの!? 医局は別なの!?

「ちよつと傑くん……！」

「あ？ 何だよ、ほら早くしろ」

「もう……」

突つ込みたくなつたものの、変に騒いで問題視されるのは私も嫌なため半泣きで傑くんを追いかけて奥に進んだ。

「これ、俺ん家の書斎に置いてきてくれねえか」

「書斎？ わかつた。流石に今はもう時間ないから仕事終わりでいいならいいけど」

「あ、それで頼む。悪いな」

「いいよ、ついでだし」

傑くんのデスクなのだろう、彼が向かつた先の机はいろんな書類で散らかっていて、小さな山も出来ていた。その山の一番上に置かれていた大きくて分厚い封筒を受け取つて逃げるよう医局を出る。

「じゃあ私はもう帰るね」

「ああ。助かつたよ。ありがとう。書類だけよろしく頼む」

「うん。届けたら一応連絡するね。じゃあまたね」

「ああ。気を付けろよ」

「うん」

これからまたオペが控えていると言う傑くんとは医局の前で別れ、一人でエレベーターに乗り込む。いくら産後に休暇を取るためとは言え、傑くんは働きすぎじゃないか……？ そう思うけど、

私が何か言つたところで意味は無いだろう。梨香子さんに後で連絡しておこうか。

それよりも、予定より遅くなつてしまつた。お腹は空いたし本当はどこかで食べて行こうと思つていたけれど、これじやあお昼はコンビニで買って急いで胃に入れるくらいしかできないかな……。そう思いながらドアを閉めようとした時に、「あ、ちょっと待つて！」と声がして、慌てて“開”的ボタンを連打した。

「はあ……はあ……間に合つた。申し訳ない。ちょっと、急いでて」

「いえ……大丈夫ですか？」

「ええ、問題無いです」

走つてきたのであるう、傑くんと同じような白衣を着た姿が、エレベーターの中に勢いよく飛び込んできた。下を向いて息を整えているから顔はよく見えないけれど、多分、傑くんと同年代のドクターだろう。

「そうですか……。えつと、何階ですか？」

「ああ、一階お願いします」

「はい」

どうやら行き先は一緒らしい。今度こそ“閉”的ボタンを押し、ドアを閉める。  
再び音も無く下がつていくエレベーターの中で、ちらりと隣の影を見上げた。

百五十センチしかない私とは頭一つ分以上違うのではないかというほどの高身長。清潔感のある黒髪は癖毛なのかパーマなのか、見るからにふわふわだ。

「……ん？　どうかなさいましたか？」

きよとんとした声と共にこちらを向いたその顔。切れ長の目が鋭く見えるものの、あくびをしたのか、ほんの少し目が潤んでいるような気がした。長い睫毛にも滲んだ涙が少し付いて、なんとも色氣のある目元。横からだとよく見える筋の通った高い鼻に、大きな口。

……かつこいい。一言、そう思った。

「……あ、いえ、すみません。何でもありません……」

見られていることがバレて、恥ずかしくて勢いよく目を逸らす。

「あれ、貴女は……」

なのに、彼は私の顔を覗き込もうとしてきて。一步足を引くものの、じりじり詰め寄つてくる。潤んだ目元を指で拭つていてる辺り、さつきまでは涙であり見えていなかつたのだろうか。数秒前と逆転した立場に、私は今すぐ逃げ出したい衝動に駆られた。

そんな時にタイミングが良いのか悪いのか、エレベーターが到着を知らせてドアが開く。「ど、どうぞ。着きました」

「ああはい。ありがとうございます」

下を向きながら手で指示示して、降りたのを確認してから私も足を進める。そのまま逃げるように出入口に向かおうとした私を、何故だか彼は後ろから呼び止めた。

「あの！」

「……はい？」

「俺たち、……どつかで会つたことない？」

急にぶつきらぼうな話し方に変わり、驚いて振り向いた。耳心地の良いテノールボイスが、直接脳に響いて来る。

「……私と、ですか？」

「うん」

頬に手を当てて、私の顔をじっと見つめる。その眉間はシワが寄り険しいのに、元々の顔立ちの良さなのか、どこか色氣を放っているようにすら感じた。

「……人違いじゃないですか？」

こんなイケメン、一度会つたら忘れるはずがない。なのに、私の記憶上に浮かぶ名前は無かつた。ということはおそらく知らない人だろう。そんなことよりも、早く会社に戻らないと午後の業務に遅刻してしまう。コンビニにも寄りたいし、急がないと。

「申し訳ありません。急いでるので、こちらで失礼します」

その場を去ろうとした私を、あろうことか彼はまた呼び止めた。

「待つて」

「な、なんでしようか？」

今度は手首を掴まれてしまつたから、逃げようにも逃げられない。

そのまま少しの間黙つたかと思うと、ハツとしたように私を見つめた。

「……三年前。ニューヨーク」

「え？」

何を言つているのかわからなくて、聞き返してしまった。

それを聞いて数秒後。私の手首を掴む彼の手に、ほんの少し力が入った。

「やつぱりそうだ。思い出した。髪の色違うからまさかと思つたけど。お前、傑の従兄妹だろ？」

「ニューヨークで会つた」

「ニューヨーク？ 三年前？」

私のダークブラウンの髪の毛をさらりと触られて、ビクリと肩が跳ねる。

「……忘れたとは言わせねえぞ？ 傑の結婚式の日のこと」

その言葉で、私の脳裏に一気に様々な記憶が蘇ってきた。

人は誰しも、忘れない過去があるとは言うけれど。忘れていた、いや、忘れたつもりになつていたと言つた方が正しいだろうか。その記憶が、彼のたつた一言で鮮明に思い出された。

「……ま、まさか。あの時の……？」

わなわなと震えながら、顔がどんどん赤くなっていくのが自分でもわかる。それに対して、目の前の彼はゆつくりと口角を上げ、綺麗な笑顔を作り出す。しかし、それは私にとつては“綺麗すぎて怖い”ものだつた。

「ご名答。……まさか、こんなところで会うなんてな」

三年前のニューヨーク。傑くんの結婚式の日のことと言えば、アレしかない。でも、あの日の男性とは少し雰囲気が違うからか、全然気が付かなかつた。

それはそうだろう。あの時は白衣姿ではなく正装だつたし、髪の毛もセットされていていたのだから。「なんでここにいんの？ 傑に用事？」

私の手首を掴んだままそんなことを聞いてくる目の前の彼に、私は顔が引き攣る。

「いや、私は別に……呼ばれただけで……」

なんで。どうして。そんな言葉しか頭に浮かんでこない。

どうやら驚きの余り、語彙力がどこかに出かけていなくなつてしまつたらしい。封筒を掴んでいる手に無意識に力が入り、中で紙が折れる音がした。

「ふうん？ まあいいや。あ、ちょっと待つて、スマホ出して」

「え？」

「早く」

「あ、はあ……」

早くと急かされ、動搖したままスマホを渡してしまつた。別に見られて困るようなアプリも無い

からそこは問題無い。言われるがままにロックを解除し、数十秒操作された後に返されたそれ。一看すると何も変わつていないうに見えて首を傾げる。そんな私を見て、彼はニヒルに微笑んだ。

「それ、俺の連絡先入れといたから」「……え!?」

「今日の夜空けといて」

「ええ……!?」

「せつかく再会したんだ。これも何かの縁だろ？ 食事でも行こう」

「そんな、急に言われても……！」

「今夜十九時。迎えに行く」

「迎えって……どこに」

「あ？ お前の会社に決まつてんだろーが」

「でも、勤務先なんて言つてな……」

い、と言おうとして、自分の胸元に社員証がかかつていていた。そこには私の名前と社名に部署名、さらにはご丁寧に顔写真まで載っている。会社にいる間は当たり前にずっと首から下げているから忘れていた。

これじやあプライバシーもなにもあつたもんじやない。それを手に取り、恥ずかしくて赤面した。

「逃げんじやねーぞ？ ……唯香」

そのしたり顔に、心臓が大きく高鳴つた。私の頭を乱雑に撫でて、彼は駆け足でその場を去つていく。乱れた髪の毛を整えながら、私は自分の鼓動が全く落ち着かないことを自覚して、さらに赤面する。とてもじやないが、動搖を隠しきれない。

「……会社、戻らなきや……」

思い出して腕時計を凝視する。あと十分で午後の業務開始時間だ。この病院からは全力で走つて十分で着くか着かないか……、というところ。もうお昼は諦めるしかない。

「もうつ……なんなのつ……」

それに気が付いて、私は慌てて走り出した。

全力疾走した結果、ギリギリ午後の業務開始时刻に間に合つた私。しかし汗だくで息切れしていたため、同僚たちからの引いた視線がつらかった。

自分の汗臭さがつらい。シャワー浴びたい。そんな気持ちを抑えてどうにか息を整えて、午後の業務を始めたものの。あの男性のことを思い出てしまつて、まともに集中なんてできただもんじやない。パソコンに向ひ合つたばかりなのにため息しか吐かない私を、隣のデスクの先輩、中本さんなかもとが困惑気味に見ていた。

「は、春風さん？ 大丈夫……？」

「はい……。大丈夫です」

「そう？ ならいいんだけど……」

「はい」

それに苦笑いをしながら席を立つ。

「あ、ちょっとコーヒー淹れますね」

「うん、わかつた」

このままじゃダメだ。仕事どころじゃない。コーヒー飲んでちょっと落ち着こう。

諦めてパソコン画面にロックをかけ、給湯室に向かつた。

私は、二階堂総合病院のすぐ近くにあるN薬品に勤めている。先ほどまでいた二階堂総合病院と

同じNIKAIIDOグループに属している企業で、社員が言う事ではないかもしれないが、医薬品業界では有名な、ハツル大手企業。

品業界では有名な  
いわゆる力手企業た

私が勤める会社は、医療機器を様々な病院に卸したり社名の通り医薬品を開発したりと、医療関係に特化した商品を扱っている。私はその中の総務部総務課に所属しており、事務職として新卒入社した。三年目の今年は、自分の仕事だけではなく新人教育も任されて忙しい毎日だ。

あんな口約束、無視してしまえばいいだけだということはわかっている。だけど、傑くんの知り

それならば最初から諦めた方がいいのだ。

「……いや、ほら、連絡先も会社もバレてるし。逃げたくたつて逃げようがないし、ね……」

ゲイツと一杯飲んで、その苦味に眉を蹙める。

……よし  
集中しないと

両頬を軽く叩き、気合を入れて自分のデスクに戻った。

「……やつと終わつた……」

自分の要領の悪さを恨みたくてため息がこぼれ落ちる。やはり全然仕事に集中できなかつた。結局予定していた分の仕事が終わつた頃には定時を大幅に過ぎており、十八時半になつていた。急いで帰り支度をして、トイレで化粧直しをする。

自分に言い訳を零しつつ、鞄を持つて恐る恐る自社ビルを出た。

ノ  
。ミ・ズ・ジ・ア・ラ・テ・リ・

スマホが着信を知らせたのは、そんな矢先だった。“天音”と表示された画面。それに首を傾げる。そういえば、彼の名前を私は知らない。これだけだと苗字とも下の名前とも取れる。これが彼の名前なのだろうか。いや、社内や友達にこんな名前の人はない。自分自身で登録した記憶も無いのだから、十中八九これが彼の名前なのだ。

意を決してスマホを耳に当てる。

『あ、唯香？ 今着いたんだけど、どこにいる？』

からの電話だとわかると、急にそわそわしてしまう。

「……会社の前ですけど……、本当に来たんですね」

『当たり前だろ。……あ、いた。こつちこつち』

こつちつてどつちだよ。そんな言葉は飲み込んで、辺りをきよろきよろと見回す。

すぐに見つけたのは、昼間見た端正な顔立ちと共にある真っ黒なセダン。見ただけで高級車だとわかるのは、車に疎い私も知っている有名なエンブレムが付いた左ハンドルの外車だったからだ。手招きしている姿に躊躇しながらも、小走りでそちらに向かう。

「……お、お待たせしました」

何を言えば良いかわからなくて、そんなことを言いながら会釈する。すると天音さんは昼間とは違い、それはそれは嬉しそうに笑った。

「逃げないでちゃんと待ってたんだ？ 偉いな」

「……ざ、残業してただけです」

また雑に頭を撫でられて、髪の毛が乱れる。

やめてください、と呟いて手櫛で直すと、今度は面白そうに笑った。

「唯香、この後の予定は？」

「傑くんの家に届け物しないといけないのでそれだけです。……残念ながらそれ以外はございません」

「なんだ、棘のある言い方だな。急に誘つたから怒つてんのか？」

「……」

怒っているのかと聞かれたら、特別そういうわけではない。でもやつぱり良い気はしない。

そもそも私に今日の予定があつたらどうするつもりだつたんだろうか。あるいは、私が待たずに帰つていたら？ この人はそういうことは考えなかつたのだろうか。悶々としている私に、天音さんは困つたよう眉を下した。

「悪かったよ。でも、お前こうでもしないと俺と話そとしないだろ。絶対逃げると思ったから」「……よくお分かりで」

図星なのがさらに腹立たしい。

「まあ、その届け物とやらを終わらせてから、何か食べながら少し話そ。食いたいものは？」  
食べたいもの……。昨日お金下ろしたから、財布はいつもより潤つているはず。

「え、つと……じゃあ、和食がいいかな」

パツと思いついたものを言うと、「ん、了解」と微笑んでから天音さんはすぐにどこかに電話をかけ始めた。

「今から二人で伺いたいのですが、個室をお願いできますか」

「えつ！？ 個室!?」

思わず口を挟んでしまつて、見下ろすような視線を感じて慌てて手で口元を押さえた。

これ、もしかしてめちゃくちゃ高級なお店の予約をしてくれているのでは……？ 普通に居酒屋とか言えば良かった……。後悔するも時すでに遅し。

「ええ。すみません。ありがとうございます。じゃあ、三十分後に」

「そう言つて電話を切つた天音さんは、

「ほら、乗れよ」

高級外車の助手席のドアを開けて、私の手を取つてスマートにエスコートしてくれた。

「いや、自分で乘れますから……」

「いいから、ほら」

初めての経験に、緊張と驚きで心臓がバクバクと激しく動く。そんな私を知つてか知らずか、思ひの外優しくドアを閉めてくれる。そしてすぐに彼も運転席に乗り込んだ。

……左ハンドルの車、初めて乗つたかも。

運転するわけじゃないのに自分が右側にいるなんて、なんだか変な感じだ。まあ、そもそも私は免許こそあれどペーパードライバーだから右側に座ることすらほぼ無いんだけども。

そのまま天音さんの運転で傑くんの家に向かい、頬まれていた封筒を書斎に置いてから再び車に乗り込む。向かつた先は、二階堂総合病院の近くにある懐石料理が楽しめる料亭だった。

やつぱり明らかに高そうなお店に萎縮してしまう。オフィスカジュアルで来てしまったけれど、ドレスコードとかは問題ないのだろうか。

「いらっしゃいませ。お待ちいたしておりました。こちらへどうぞ」

出迎えてくれた着物に身を包んだ上品な女性が、丁寧に頭を下げてからにこやかに微笑んで案内してくれる。聞いた話だとここは天音さんの知り合いが経営しているらしく、そのツテで急遽席を

用意してくれたらしい。お店に入る時も、その女性の向こうで他のスタッフの方がキビキビと忙しく動いていたことを知つてゐるため、なんだか申し訳ない気持ちになつた。

案内してもらつた個室は十畳のスペースで、そこはまるで旅館の一室のよう。一枚板で出来てゐるであろう大きなテーブルと、座椅子が二つ。促されるままにそこに腰掛けると、畳のいぐさの香りが心地良く鼻に抜けた。

「何食べる？」

「えっと……私、お恥ずかしいことにこういう高級なところは来るのが初めてで。……何かおすすめありますか？」

和食の料亭なのにお品書きにはいくつか横文字も並んでいるように見える。恐れ多くて自分じゃ選べない。

「どうか。苦手なものは？」

「特にありません」

「わかった。じゃあ無難にコースにするか」

「コース……!?」

「ん？ 何か問題あるか？」

「え、いや……」

思わず言葉に驚いて、天音さんが見ていたお品書きを見せてもらう。コース料理の値段を確認しようとしたものの、そもそもこのお品書きには書いていなかつた。

……もしや、お金持ちは値段なんて気にしないから、書くだけ無駄つてこと……？  
ますます自分が場違いな気がして恥ずかしい。……足りなかつたらカードで払おう。  
病院にいる時と同じ居た堪れなさを感じて、ため息を吐きたくなつた。

「ああ、値段なら気にするよ？ 今日は俺の奢りだ」

そんな時に聞こえた声に、顔を上げる。

「え……？」

「当たり前だろ。急に誘つて時間作らせたんだ。何考えてんのか知らねえけど、最初からお前に払わせるつもりねえよ。安心して好きなもの食え」

「でも……それじゃああまりにも申し訳ないです。自分の分は自分で払います」

「いいって。気にすんな」

私を牽制して、天音さんは慣れたようにコース料理を二人分頼む。アルコールは？ と勧められたものの、運転する天音さんが飲めないのに私だけ飲むのは恐れ多い。そう思つてそれは丁重にお断りをした。しばらくして、先附の胡麻豆腐と蛸の煮物が運ばれてきた。天音さんに促されるまま口に運ぶと、今までに無いほどの美味しさに、目を見開く。

「……おいしい」

蛸つて、こんなに柔らかくなるの？ 胡麻豆腐も香り豊かでとても美味しい。

「ここ、俺が最屨にしてる店なんだ。出てくるもん全部美味いよ」

「そうなんですね！ 私、こんな美味しい料理食べたのは初めてです！」

その美味しさに驚いて天音さんに笑顔を向けると、むしろ天音さんの方が驚いた顔をする。

「ここ、傑も梨香子さんとよく来てる常連」だけど。連れてきてもらつたりしないのか？」

「はい。あくまでも私と傑くんは従兄妹ですし、傑くんは昔から梨香子さんしか見えていないので。私のことなんて基本眼中にないので構つてる時間が無いんですよ」

「そういうものか？」

「はい。それに私も普段から傑くんにべつたりしてゐるわけじゃないですよ。友達もいるし。仕事もあるし。ありがたいことに梨香子さんに妹みたいに可愛がつてもらつてるだけです」

「そ、うか」

昔から梨香子さん一筋で、私が物心ついた時から傑くんは梨香子さんのために行動していた気がする。

今日だつてそうだ。梨香子さんのために私を呼びつけた。そんなのも昔からのことだから、私も慣れたものだ。梨香子さんは優しくて穏やかで良い人だし、私を本当の妹のように可愛がつてくれる。傑くんも一応感謝はしてくれるから、そこに不満は無い。というか傑くんに対してもほぼ諦めの方が大きい。まあ、今日みたいに待ち合わせ時間に遅れるのは人として気を付けてほしいけれど。

そんな話をしばらくしているうちにコースは進み、前菜、お椀、お造りを経て焼き物が運ばれてきた。今のところどれもが頬が落ちそうなほどに美味しいくて、一口食べ進めるたびに目尻がだらしなく垂れてしまう。

天音さんはそんな私を庶民だと嘲笑うでもなく、馬鹿にするでもなく、楽しそうに微笑んでくれ

る。食べているところをじつと見られるのは恥ずかしいけれど、美味しさの方が優っている。その視線を気にしないようにして、私も存分にこの美味しさを味わうこととした。

食事が終わると、静かな空気が流れた。食事中は美味しさに顔を綻ばせていいだけだったものの、改めて考えると今の状況の可笑しさに、目眩がしそうだ。

食後に出されたお茶を少しづつ飲んでいるものの、緊張からかどこかそわそわしてしまう。

「唯香、いろいろ聞いても良いか?」

「はい……」

「つか、そもそもお前とはあの日会ったつきりだから、お前のこと何も知らねえんだよな」

「そう、ですね」

私も、天音さんことは全然知らない。じつと見つめていると、天音さんは考えてからこちらを向いた。

「唯香、歳は?」

「二十五、です」

「ふーん。俺は三十五」

「傑くんと同じ年なんですか?」

「そう。俺と傑は大学の同期」

「なるほど……あれ?あの時そんな話もしたつけ……」

「したな」

「…………すみません」

「いや、気にすんな。もう三年も経つてるんだから」「はは……」

大学の同期で、今は二人とも二階堂総合病院のドクターだなんて。そもそも、二階堂総合病院は患者層の関係で一流の腕を持つドクターしか雇っていないと聞いたことがある。

傑くんは、普段はあんな感じだけど、アメリカに渡つて向こうでも医師免許を取得して、数々の難病患者さんを救つてきた、まごうことなきエリート医師だ。その同僚なわけだから、気が付かなかつただけでもしかして、この人もかなりのエリートなのでは……!?

「あ、天音さん……は、そういうえば何科のドクターなんですか?」

「俺?俺は外科。だから傑とは院内ではさほど関わりが無いかな。カンファレンスで会うくら

いだ」

「そうなんだ……」

二階堂総合病院の外科医なんて、明らかにエリートじゃないか……!

それ以上は私の頭が処理しきれなくなりそだつたため、院内の話は聞かなかつた。

「…………そういうえば、天音さんって、苗字ですか?下のお名前ですか?」

話題を変えたくてずっと気になっていたことを意を決して聞くものの、天音さんはニヤッと笑う。

「…………どっちだと思う?」

その楽しそうな表情に私の顔が引き攣る。確かに質問したのは私だけれど、質問に質問返しはや

めてほしいと思つてしまふ。

「……御苗字でしようか」

「いや？」 違う

「じゃあ、下のお名前ですか？」

「そう。ご名答」

案外すぐ答えてくれたことに複雑な心境になつた。

「……では、御苗字を教えてください」

「なんで？」

「なんでつて……」

大して親しくもない間柄で、まして年上で傑くんの同僚のドクターを下の名前で呼ぶなんて、私は到底無理だ。しかし、天音さんはそれを全く理解できないようで不思議そうな顔をする。

「別に苗字なんて知らなくてもいいだろ。俺のことは天音つて呼べよ。さん付けもいらないから」

「そ、それはダメです」

「なんで」

「なんでつて……」

「ほら、天音つて呼べよ」

「いや、……」

ああ、もういいや。これはもう埒が明かない。苗字は今度傑くんに聞こう。

そう思つて口を開さすと、何を思つたのか天音さんは水を一口飲んでから立ち上がり、テーブルを挟んでいた私の元へ来る。そして耳元に顔を寄せ、

「唯香」

と囁いた。

「……三年前、一緒に寝た間柄だろ？」

「つ……！」

「お前があの夜、どれだけ俺に縋つて乱れてよがつてたか、覚えてんだろ？ 全部傑にバラしてもいいけど？」

「瞬にして、息が吸えなくなつた。耳にかかる息が、あの夜を思い出させる。

「つ……近い、です。離れてください」

天音さんの顔を押しのけるわけにもいかず、自分の耳を手で押さえつつ、顔ができるだけ逆側にそらす。

「嫌だ」

そんな私の反応を見て、面白くなつたのか天音さんはさらに追いかけてくる。逸らした顔を手で元に戻され、ゆつくりと頬を撫でられる。その撫で方がいやらしくて、無意識に呼吸が浅くなつた。

「ほら、天音つて呼べよ」

「や……」

「じゃないと、このままキスするけど」

そんなこと言わても、いきなり呼び捨てなんて……。でも、呼ばない限り私を解放するつもりはないようで、どんどん顔が近付いているような気がする。

「ちよつ……まつて……」

「待たねえ」

このままじゃ、本当にキスされてしまう。

なによりも、その目で見つめられているというこの体勢が恥ずかしすぎてもう無理だった。  
「あ……あ、あまねつ……！」

自棄になつて言葉を落とすと、彼は「ふつ……言えるじやん。よくできました」と尻を下げて笑つた。その小さい子を諭すような返事に、自分が弄ばれたような気がして悔しくて悔しくてならない。

「これから俺のことはそう呼べよ。さん付け禁止」

そんなの横暴だ。そう言いたいけれど、今は離れてもらう方が先だつた。

「わかりましたから、離れてください」

「呼べば離れるとは言つてない」

「なつ……！」

酷い！ そんなの屁理屈だ……！

至極面白 そうなその表情は、まるで新しいおもちゃを見つけた小さな子どものよう。

そして、そのまま顔が近付いてきて。

「つ!?

触れるだけのキスは、私を硬直させるには十分すぎるほどだつた。

「ハツ、顔真つ赤だな」

「な、な……」

何かを言い返したいのに、何も言葉が出てこない。

息の吸い方も忘れてしまつたみたいに、なんだか胸が苦しくて、上手く呼吸ができない。  
なんだ、これ。

「何も初めてじゃないんだし。そんなに動搖するか?？」

クスクスと笑いながらも、ようやく離れてくれた。それにより、やつと呼吸ができるようになつた。少なからずホツとしつつも奪われてしまつた唇を思わず袖でゴシゴシと擦る。

「失礼な奴だな」

「きゅ、急にこんなことする方が失礼ですよ。セクハラです！」

「セクハラあ？ キスなんて、挨拶みたいなもんだろ？」

「ここは日本です！」

確かに傑くんと同じなら、貴方はアメリカにいたのかもしれませんけど！ ここは日本だし、多

分貴方もここ数年はずつと日本で暮らしているでしよう?!

そんな思いをぶちまけたいけれど、何かを言えば五倍で返つてきそうな楽しそうな顔だ。多分こ

の人、傑くんと同じタイプで口が立つ人だ。そう思うと保身のためそれ以上は何も言わずに口を噤むしかなかった。

結局その後は、天音が急患で病院から呼び出しをされたためそのままお開きとなつた。

「悪い。オンコールだ。また連絡する。無視すんなよ？」

「……わかってますよ」

弱みを握られてしまつては、そう返事をするしかない。

宣言通り天音は料金を払ってくれて、私に財布すら出させなかつた。丁重にお礼を伝えて別れ、そのまま天音が手配してくれたタクシーに乗り込むと、自宅の住所を伝えて滑らかに発進する。

十五分ほどで着いた自宅であるオンボロアパートの中に入ると、すぐにお風呂を沸かしてシャワーを浴びた。熱いお湯を頭から被る。

下を向き自分の髪の毛から滴り落ちるお湯を見つめながら、今日のことを思い返していた。

まさか、天音と再会する日が来るなんて思つてもみなかつた。まして、あの病院にいるだなんて。いや、可能性を考えなかつたわけじゃない。でも、そもそも天音と会つたのは傑くんの結婚式の日だけなのに、私のことを覚えていただなんて……

あの日、私たちは初対面で、酔つた勢いもあつて一夜を共にしてしまつたのだつた。

\*\*\*\*\*

——遡ること三年前。

当時まだ大学四年生だった私はすでに今の会社への内定をもらつていたため、ニューヨークでの挙式の招待状が届いた際にすぐに出席で返事を出していた。季節は秋。

「就活終わつたんだし髪染めて来れば良かつた」

黒髪に戻したままのロングヘア。綺麗にセットしてもらつたけれど、どうせならもうちょっと柔らかい色にしてくるべきだつたと少し気持ちは落ち込んでいた。

会場はニューヨークのマンハッタンから傑くんが手配してくれたタクシーで一時間ほど。

「すごい……本当にお城だ……」

周りが紅葉した木々に囲まれていて、とても幻想的。髪色で落ち込んでいた気持ちは、すぐに上向きに戻つた。その建物の中にはドイツの家具職人が手掛けた家具が置かれている。温かみと優雅さを兼ね備えた内装は、そこにいるだけで自分自身がセレブやお姫様になつたと錯覚させるような素晴らしい空間だつた。

アットホームな式がしたいという梨香子さんの強い希望により、親族とそれに準ずる人のみが招待された挙式。そのため、私と同年代の招待客はほほいない。しかし素敵な空間と綺麗なドレス姿の梨香子さんを見ているだけで、そんなことは気にならなかつた。

讃美歌も、日本で聴くものとは迫力が違うような気がして圧倒された。指輪の交換も誓いのキスも、まるで一枚の絵画かのような光景で。

惚れ惚れするほど綺麗な梨香子さんの幸せそうな表情が印象的だつた。

挙式のあとにウエディングレセプションが行われ、その会場に向かうとスタッフの方に席に案内された。

隣には、懐かしい男性が座つていた。それは、随分と久しぶりに会う私の父親だつた。

私と傑くんは従兄妹同士。厳密に言えばお互いの父親が兄弟だ。しかし私の両親は私が幼い頃に離婚しており、私の親権は母親に渡つたためその後父親には全く会つていなかつた。

そういう場合は普通傑くんとも疎遠になることが多いのだろうが、傑くんの幼馴染だつた梨香子さんとも仲良くしてもらつていたからだろう。私は未だに傑くんと連絡を取り合つていたのだ。

「唯香」

「……お久しぶりです」

「久しぶりだな。こんなに大きくなつて。見違えたよ」

「……どうも」

久しぶりに会つた父親は、記憶上よりも大分老けている印象だつた。当たり前だ。私と一緒に暮らしていた時から十年以上経つたのだから。

父親は久しぶりに会つた私といろいろと話したかったようだが、私は今更何を話したら良いか分からず。“お父さん”と呼ぶことすら躊躇てしまい、適当に返事をしながら出された食事に集中した。正直、どんな話をしたのかなんて全く覚えていない。

パーティが終わり、何か言いたそうにしていた父親から逃げるよう別れた私はそのまま二次

会に顔を出した。まあ、知り合いなんていないから傑くんと梨香子さんに挨拶だけしてすぐ部屋に戻つたのだけれど。

その頃にはすでに外は暗くなり始めており、私はそのままホテルに宿泊するためフロントへ。傑くんと梨香子さんが用意してくれていた部屋にチェックインし、そこで一息つく。

窓からはハドソン川の雄大な絶景を楽しむことができ、部屋も広くてとても豪華だつた。

「すごい……！ 綺麗！」

それに興奮冷めやらぬ中、日が完全に落ちる前に絶景を写真に収め母親にメッセージで送信。そのまま母親とやり取りを続けながらゆつくりしていると、ふいに梨香子さんからのメッセージがスマートフォンに届いたのだ。

“部屋に戻る途中にラウンジで美味しいそうなワインを見つけちゃつてね。一度着替えてからまたラウンジに来て今そのワインをいただいてるの。良かつたら唯香ちゃんも一緒にどう？”

それを見て、せつかくだしと思い“わかりました。今から行きます”と返事をする。美味しいワイン、楽しみだなあ。

部屋を出て、指定されたラウンジへ向かつた。

「梨香子さん……？」

しかしそこで予想外の事態が広がつていた。梨香子さんと傑くんは、メッセージで話していたワインの他にもたくさんのお酒を飲んでいたらしい。梨香子さんが大分酔つてしまつていたのだ。

「あ、唯香ちゃん！ こっち！ 一緒に飲もう！」

「梨香子さん……」

その頬は真っ赤で目がとろんとしており、言葉を失う。

どれだけ飲んだのだろう。普段の梨香子さんからは考えられないほどに酔つており、テーブルの上を見るとそこには何本も空になつた数種類のお酒のボトルが。そしてそんな梨香子さんはまだ飲もうとしているらしく、傑くんの持つワイングラスに新しい赤ワインを注いでいた。

「ほーら、唯香ちゃん、ここ！　早く座つて！」

口調はしつかりしているし聞き取れる。会話も出来ていてるからまだギリギリ大丈夫か……？

そう考えて「梨香子さん、飲み過ぎですよ」と言いながら隣に腰掛けて梨香子さんが手に持つグラスを受け取つた。

「あ！　唯香ちゃん！　それ私の！」

「梨香子さん、飲み過ぎですって。すぐ一日酔いになるんだから、やめといたほうがいいですよ？」

「いいの！　結婚式の日くらいハメ外させてー！」

「もう……」

梨香子さんは昔からお酒が強い分、大量に飲んでしまう。そして周りの人に行つたり飲ませようとしたりとなかなかタチが悪い。いわゆるからみ酒というやつだ。しかも翌日には「一日酔いに悩まされ、前日の行動を全く覚えていない」という特大のオマケ付き。そのため普段は傑くんも梨香子さんに人前でアルコールを飲まないよう口酸っぱく言つていた。

でも式のためにしばらく禁酒して、ダイエットを頑張つっていたのも知つていて。一生に一度のハ

レの日くらい好きなだけ飲みたい。その気持ちもわかるし、傑くんも今日だけ特別にとことで許可したのだろう。そう思うとダメとは言えず、ほぼ意味がないとわかりつつも「飲み過ぎないと」を約束の上でグラスを返した。

その代わりに新しいグラスを手渡され、そこにたっぷりと注がれてしまつたワイン。

「梨香子さん……？　えっと……これは一体……」

「すごく美味しいワインだつたから、唯香ちゃんにも飲んでほしくて。でもね？　このワインおかげしいのよ。美味しいからたくさん飲んでるのにすぐ無くなっちゃうの。ね、変でしよう？」  
梨香子さんは普段からふわふわしている人だけど、こんなにめちゃくちゃな言動はしない人だ。やはり相当酔つているよう。

「そりゃあ飲めば減りますよ……梨香子さんすごいペースで飲んでるでしょう。いいですか？　ワインは飲めば無くなるんですよ！」

私は当たり前のことを梨香子さんに言い聞かせるように伝えながら、内心焦りが出てきていた。「やっぱり？　まあいいや。だからいっぱい入れとくね。早く飲まないと私が飲んじゃうからね！」  
……それはまずい。

これ以上飲ませたら、梨香子さんは明日まともに起き上がるこすらキツくなるだろう。どんなにお酒が強くても、下手したら飲み過ぎて急性アルコール中毒にだつてなりかねない。しばらく禁酒していたんだからアルコールの回りも早いはず。それは絶対あってはならないわけで。

まだ半分以上ワインが入っているボトルを見て、手に持つたっぷりとワインが入ったグラスと何

度も見比べる。

……でもこれ、梨香子さんの代わりに全部飲んだら私が酔いつぶれるんじやない?  
梨香子さんの隣を見ると、すでに同じ理由で大量に飲んでしまったであろう傑くんは一人で意味も無く笑っている。しかも、梨香子さんと同じように誰かを呼んだのかスマートフォンを操作してはニヤニヤしていた。

「傑くん……」

それに引いた視線を送りながらも、

「ほら唯香ちゃん！ 早く！」

「あ、はい……」

梨香子さんに勧められるがままにとりあえずグラスを口に運んだ。  
十分ほどしてやつてきたのは、見目麗しい男性だった。切れ長の目が、呆れた様子で一人を見比べていたように思う。

「おい、傑？ 梨香子さん？ ……マジかよ。二人とも馬鹿みてえに酔つてんな」

傑くんと同年代の男性、それが天音だったのだ。

天音は目の前の酔っ払い二人を見て、深いため息を吐く。そしてふと視界に私が入つたらしく、「……ん？ お前誰？」

と雑に声をかけてきた。

「……私？ 傑くんのイトコ」

「へえ。こいつに従兄妹なんていたんだ？」

物珍しそうな顔をして、私が飲んでいたワイングラスをひょいと持つていく。

「あ」

「なんだよ」

「それ私の……」

返して、と言うものの、すでに天音は私のワイングラスを口に傾けていた。

「ちょっと、勝手に飲まないでよ」

「……お前がどれくらい酒強いのかは知らねえけど、飲み過ぎたらこいつらみてえになるぞ」

そんなことを言われても、実は天音が来た頃にはもうすでに梨香子さんにガンガンに飲まされてしまい、頭はふわふわしていた。

「だつて、私が飲まないと梨香子さんがこれ全部飲むとか言うから。これ以上飲ませたら私が傑くんに怒られちゃう」

「いや、この調子じゃもう手遅れだろ」

「……」

天音がワインを飲みながら指差した先には、いつのまにか寄り添うように寝てしまつた一人の姿。

「ハメ外しすぎだろ。ガキかよ」

「まあ、仕方ないでしょ。酒癖の問題で梨香子さん、滅多にお酒飲ませてもらえないって前に嘆いてたから。最近は今日のために禁酒してたし」

「へえ。……まあ、これは確かに彼氏や夫からすれば飲ませたくないわな」  
そう笑った天音は、あつという間にグラスのワインを飲み干してしまった。

「……二人、どうしよう……」

「あー……こいつらの部屋の場所知ってるか?」

「知らない……」

「そうだ、運ぶにしても部屋がわからない」とどうすることもできない。時間も時間だし部屋に一度戻つたつて言つてたからチェックインはしてるはず。だけど肝心のカードキーは見当たらないし、部屋番号がわかるものも何も持つていなさそうだった。

「仕方ねえな……おい傑! 部屋どこだ! 早く言え!」

どうするのかと思つていたら、あることか天音は傑くんを無理矢理起こして部屋番号を聞き出した。どうやらカードキーもフロントに預けているらしい。

果たしてその部屋番号が合つているのかは不安しかなかつたものの、フロントまで天音が行つてくれて、無事にカードキーを受け取つてきてくれた。

「よし、じゃあ行くか」

頷いて、とりあえず二人を部屋まで運ぶため私は梨香子さんを。天音は傑くんを連れて行くことに。

「梨香子さん、立てます?」

「んー……無理いい」

「部屋に着くまでの間だけでいいですから、ちょっと頑張つて!」「唯香ちゃん、連れてつてえー!」

「連れて行きますから。だから立つて歩いてくださいよー!」

ラウンジのスタッフに天音が流暢な英語で声を掛けてくれて、とりあえず腕を肩に回してどうにか起き上がるさせる。エレベーターの存在にここまで感謝したことはないだろう。そのまま二人の部屋に運んでベッドに寝かせた。キングサイズのベッドで寄り添つて眠る二人を見届けて、サイドテーブルに書き置きを残して部屋を出る。二人の部屋の前で、天音と一緒にようやく息を吐いた。  
「——さて、あの残つたワイン、どうする?」「……どうするつて言われても……もう片付けられてるんじや?」「いや、スタッフに一応残しておいてくれつて頼んである」「そうなんだ……それならまあ、もつたいたいから飲もうかな」「お前も酔い潰れて寝るとかやめろよ?」「大丈夫。まだ酔つてないし」

そんな強がりを言つて、二人並んでラウンジへ戻ることに。どちらも自己紹介をしなかつたため、当時はお互いの名前すら知らない。会話も特に無いまま、ひたすらお酒を飲んだ。

「お前、部屋どこ?」

「一〇七号室」

「マジかよ。俺の向かいじやん」

「へえ……」

すっかり酔つてしまつていた私は、相槌すら適当になつていて。

「ここももう閉まるつて言うし、……俺の部屋で飲み直さねえ？」

普段なら、名前も知らない初対面の男からそんな風に誘われたところで、絶対についていかない。なのに、この日に限つては。

潰れてはいないものの、今までにないくらい酔つていた私は、頭が全く働いていなかつた。

「ん、いーよ。そうする」

頷いた私に、天音は一瞬驚いた顔をした。もしかしたら、冗談のつもりだつたのかもしれない。まさか私が頷くなんて思つていなかつたのだろう。

「……お前、意味わかつて言つてる？」

そんなお伺いにも、「うん。わかつてるわかつてる。早く行こー」なんて、知つたかぶりして適当に返事をした。

天音の言つていた通り、そこは私の部屋の裏向かいだつた。どこぞの貴族のような高そうな家具ばかりが並ぶ部屋は、当たり前だが私の部屋よりも豪華だつた。

そこで二人、ソファに座つてワインを飲み直す。口当たりがまろやかで、フルーティーな味がとても美味しい。

「このワイン旨いよな。近くにワインナリーがあつて、そこから直接卸してるらしいよ」

「へえー……そりなんんだあ。私、このワインすつごく好き。フルーティーで美味しい」「確かに、飲みやすくて女が好きそうな味だな」

「うん」

普段はこんなにワインばかり飲むことはないのだけど。美味しさに負けて飲みすぎてしまつた。

「……貴方は、傑くんの友達？」

「ああ。大学の頃からのな」

「ふーん。じゃあ貴方もドクターなんだ？」

「まあな。お前は？」

「私はただの大学生。まあ、内定ももらつたし四月から就職するけど」

酔つていると、初対面で年上相手なのにどうも敬語が外れてしまう。

でもタメ口でも怒らないみたいだからいつか。なんて。グラスを傾けながら微笑んだ。

そのうち会話が途切れ、静かな時間が流れた。多分、私はそこで少し寝落ちしまつたんだと思う。気が付くとベッドの上に寝ていて、目の前には男性の顔のドアップが。

「ひつ……!?」

「……あ、やつと起きた」

驚いて小さく悲鳴を上げた私を、その男性、もとい、天音は呆れたように見つめた。

「人のこと誘惑しといて、自分は寝るんだもんな。良い身分だよなマジで」「なつ……なに……」

何が起こっているのかがわからなくて、言葉に詰まる。

「なにって……だからお前が誘ってきたんだろ？」

そう言つた直後に、全身を走るような甘い刺激が走つて「ああっ……!」と甲高い声が漏れた。

思わず手で口元を押さえるものの、途切れることなく襲つてくる刺激に漏れる声は抑えられない。

一体何が起きてるの!?

なんとか視線を動かすと、私の胸に吸い付くように舐めている天音がいた。

「な!? なんで!? ……あ、ああっ……」

胸の頂を口に含み、舌で転がされてまた甘い吐息が漏れる。

天音の右手はもう片方を弾くように弄り、左手はお腹を通つて足へ向かい、内腿を何度も摩つていた。その動きがいやらしくて、それすらも刺激に感じてしまつて身を捩る。

「いきなりキスしてきたのはお前だからな?」

「なつ……うそつ」

「嘘じやねーよ」

まさか、そんなわけ。

しかし、状況に追いついていけない頭に反して、身体は甘い刺激に正直に跳ねる。

次第にワンピースの裾をたくし上げられて、左手は内腿を伝つて中心にどんどん向かう。右手の動きはそのままに、いつの間にか唇は天音のそれに塞がれていた。

「ん……あ、ああ……」

舌を吸われ、ジュルジュルという水音が頭に響く。激しいキスに息切れしながら目を閉じていると、左手が私の中心にたどり着き、容赦無く刺激した。再び私を襲う甘い刺激。思わず大きな声があがる。指で何度も撫でられて、擦<sup>こす</sup>られて身体が跳ねる。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

肩で息をしていると、ベルトを外す音が聞こえてちらりと視線を送る。すると私をギラついた目で見下ろしながら、ゆっくりと私の中に入ってきた。

「あ、あ……ああああ……んんーっ……ああっ！」

奥まで入つてきただけで、私の身体は数回痙攣した。

「つ、イッた?」

「はあっ……はあっ……んあ、まつて、まだ動かないでっ……」

手で制するけれど、その手を取られて唇を塞がれる。

「んんう……ふあ、あっ……ん、あ……んんつ、ああん！」

キスと同時に腰が動き始めて、私はもう抗うことができない気持ち良さと快感に虚ろな目でまた全身を跳ねさせた。それでも天音は止まってくれなくて。

「まだ、へばんじやねえぞ」

どんどん早くなる律動。肌がぶつかり合う乾いた音が、辺りに響く。

荒々しく塞がれた唇の端からこぼれ落ちるように伝う唾液が、私の耳を濡らして。それを掬うように舌を這わせた天音に、思わず身体にギュッと力が入った。

「つ……マジかよ、まだ締め付けんの？」

うつすらと目を開けると、汗ばんだ天音のキラキラした顔が目に入る。ぼやけた視界の中でもそれははつきりと映し出されていて。

どうして私は今、こんなに綺麗な人と身体を重ねているのだろう。

そう、今更また疑問に思つてしまふ。

「……お前、今違うこと考えてるな？」

「え……」

「この状況で俺以外のこと考えてるとか、マジでムカつく」

「ち、ちがつ」

「そんな余裕無くしてやるよ」

「や……ま、つて……」

「待たねえ、よつ」

言葉と共に深く入り込む天音の身体。

「ひやああああ!!」

甲高い声を上げながら身体を仰け反らせ、襲つてくる甘く激しい刺激に頭がクラクラする。先ほどまでとは比べ物にならないほどの激しさに、上手く息ができずに

「つ、は、ま、つて……ちよつ、くるしつ……」

そう天音の肩をか弱い力で叩いた。しかし天音は

「……ハツ……悪い、もう止まれそういうもない」

バツが悪そうにそう口角を上げてから、汗で少し濡れた前髪を邪魔だと言わんばかりに搔き上げる。その姿がいやに妖艶で、色気が溢れていて。

「やべえなつ……ハマリ、そうつ」

「ま、つてつ……ああつ、んんつあああつ！」

ぐ、つと。また一つ胸が苦しくなる。

言葉通り止まることを知らない天音は、その律動をより激しくしながらも私の頬を優しく撫でた。切な気で、儘いその表情に何故か涙が溢れる私。フツと笑いながらその涙を舌でぺろりと舐めた天音は、一気に表情を歪めて突き上げるように腰を動かした。

「いやつ……！　ま！　つて！　なにつ……！」

「つ……ハツ……」

「それいじよ……、ダメつ、になるつ」

「ハツ……つ、ダメにつ、なれよつ！」

「ひやつ……あああつ！」

びくんびくんと何度も痙攣する身体。頭にビリッと電流が走ったように目の前がチカチカして、

一瞬で目の前が真っ白になる。それで終わると思つていたら、まだ天音は身体を離してくれなくて。身体を横向きにされ、片足を上げられてもつと奥深くまで突き上げてくる。イツたばかりなのに、さらにお奥を激しく突いてくるから本当におかしくなつてしまいそうで。